

台湾留学と台湾社会への視線

思いがけず、大学の初修外国語として中国語を学び始め、卒業要件に必要な4単位は1年で取得することができたが、先生の影響もあり、しだいに中国語への興味が湧き上がってきた。2年生からは単位取得に関係ない聴講生として、いくつかの中国語に関する授業に出席し、中国語運用能力を向上させることにした。そうした中で、華僑華人について文化人類学的研究をする中国人の先生と親しくなった。先生は幼いころから中国琵琶を習い、のちにプロの琵琶演奏者として活躍されたユニークな経験を持ち、筆者も楽しみながら中国語だけではなく中国文化も学ぶことができた。「どうも日本ともアメリカとも異なる世界が、中国語圏には広がっているらしい。」このような好奇心で、2年生の終りごろから、中国語圏への留学を希望するようになっていった。

当時、香川大学から留学できる交流協定校は中国と台湾にあったが、筆者は香川大学から初めての交換留学生となる台湾の国立政治大学へ留学することにした。政治大学は台湾を代表する名門大学の一つである。国民党が1927年に南京で設立した中央党務学校を前身とし、1937年の日中戦争勃発によって重慶へ移転し、その後1954年に台北で再び開校された歴史を持つ。初代校長は蒋介石、まさに国民党と歴史を共にしてきた大学である。大学名からして、日本にはないユニークな学校なのだろうと、初めての中国語圏への留学に期待を膨らませた。筆者は2005年9月から1年間交換留学することになった。

政治大学は台北市の南端、自然に囲まれた文教地区に位置し、包種茶などの茶葉の生産地として有名な猫空のすぐそばにある。猫空の茶畑には茶芸館があり、お茶を使った料理や、お茶を楽しむことができることから、台北市民の週末の行楽地としてにぎわっている。

この自然豊かな環境とは対照的に、筆者が台湾について感じた印象は「カオス(混沌)」である。中国語は声調という複数の発声法があるため、日本人には大声で叫んでいるように感じるが、それに混ざって、時折「台湾語(閩南語)」も聞こえてくる。さらにまた、台湾は「客家語」を話す人々もいる多言語社会である。日常生活のすべてが紛争や交渉の連続のように感じられた。台湾に到着して数週間はこのような光景を「活気があるなあ」と一種の羨望の眼差しで見つめていたが、しだいに「疲れる」と感じた。なぜこんなに疲れるのだろうか? この原因は単に言語の違いによるものだけではなかった。

当時の台湾は1990年代から李登輝総統によって進められた民主化後、2000年に初めて政権交代が実現し、戦後長く続いた権威主義的な一党独裁の国民党の支配が幕を閉じ、民主化運動を進めた人々を中心とした民進党の候補として陳水扁が総統に当選したのである。筆者が台湾へ留学したのは、陳水扁総統が選挙遊説中に銃撃を受けて負傷するというショッキングな事件が起き、辛うじて2期目の総統選挙に当選したところであった。立法院では依然少数与党で、党内からの批判もあり、政権基盤は不安定、おまけに家族の汚職問題などのスキャンダルで、政権が大きく揺れていた。さらに総統自身による国民党やその支

持者への憎悪を扇動するような言動が台湾社会そのものに亀裂を生み出しているようにも感じさせた。それほど、台湾社会では国民党と民進党双方の支持者が激しく衝突し、政党支持が鮮明な新聞やテレビなどのマスメディアはさらに対立を煽っていた。このような日常が筆者を疲れさせていたのである。

台湾先住民という視点

筆者は留学中、午前は大学内の語学学校に通い、午後は大学の授業に出席していたが、たまたま履修した一般教養科目である「台湾原住民」の授業を通して台湾社会を見つめる眼が大きく変わることとなった。台湾の歴史とはまさに台湾先住民の歴史である。台湾で「原住民」と呼ばれる台湾の先住民は、明朝末期や清朝後に、中国本土から台湾へ大量移住した漢人とは、全く異なる文化を持つ民族である。しかも、台湾先住民と総称される民族は、現在台湾の中央政府が認定しているだけでも16族あるが、全部あわせても台湾全人口の2%ほどしかない。しかし、これらの台湾先住民は、それぞれの社会制度、言語、文化は異なっており、多種多様である。さらに、彼らにはもともと文字がないため、日本の統治下で日本語を国語として教育されるまで、自ら文字によって記録するということがなかった。つまり、日本統治期までの台湾先住民に関する記録はすべて他者によるものなのである。

筆者に台湾社会をカオスのように感じさせた、眼前の民進党と国民党による政治闘争も、台湾先住民の視点で見つめれば、漢人による単なる内輪もめにすぎない。どちらにせよ中国大陸にルーツを持つ人々の利益をめぐる争いなのである。結局のところ、日本統治期に台湾に居住していた漢人である「本省人」も、第二次世界大戦後に国民党とともに移住してきた人々である「外省人」も、先住民から見れば外来の侵略者に過ぎない。こういう一種の冷めた眼差しが台湾先住民にはあるように感じた。さらに、筆者が台湾先住民との交流を通して、彼らの社会や文化の中に、半世紀にわたる日本統治による影響が大きいこともわかった。各民族言語の中で多用される日本語からの借用もさることながら、生活様式や価値観まで、高齢者になればなるほどその影響は強く受けているのである。筆者の知らない日本の歴史が、先住民社会には存在していたのである。

「台湾先住民」、この台湾社会を見つめる視点を根底から覆すような可能性を秘めた人々の存在に、筆者の好奇心はそそられた。われわれが考える台湾をめぐる常識が常識ではなくなる、多数者である漢人の視点も危うくさせることさえあるような、未知の世界。そのような世界が中国語圏である台湾の非中国語圏である先住民にあるのだ。筆者は台湾先住民を研究する価値をそこに見出したのである。

台湾とは何なのか? 台湾人とはだれなのか? 台湾社会とは何を指すのか? 台湾の歴史とはどのようなものなのか? 筆者が留学を通しておぼろげながらも導き出してきた台湾をめぐる常識のすべてに対して、疑問符が刻印されていったのである。

台湾社会の多様性と複雑性の原因は、この「族群(エスニック・アイデンティティ)」と「歴史の複雑性」なのである。